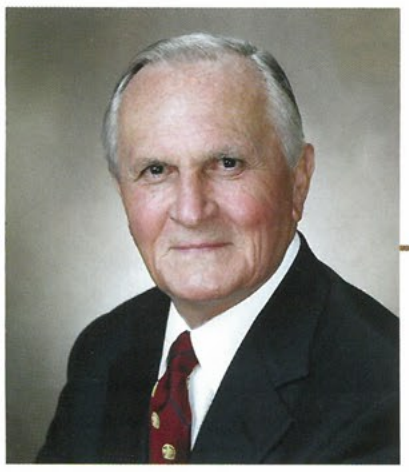
2010. Sep. Vol.2

ACS日本支部ニュース

NEWSLETTER FROM THE JAPAN CHAPTER OF AMERICAN COLLEGE OF SURGEONS

主な内容

- 巻頭言〈谷川允彦〉……P1
- 私の米国の外科医療、ACSとの関わりと日本支部への期待〈矢永勝彦〉……P2
- Clinical Congressの思い出〈吉田和彦〉……P3
- ACS International Guest Scholarshipを受賞させて頂いて〈庄雅之〉……P4



ACS 会長

ラマー S.マクギニス

LaMar S. McGinnis, MD, FACS
President
American College of Surgeons

ACS 日本支部長
大阪医科大学 一般・消化器外科 教授

谷 川 允 彦

Nobuhiko Tanigawa, MD, FACS
President of the Japan Chapter
Governor, American Collge of Surgeons

The 96th Clinical Congress of the American College of Surgeons An Invitation

In the spring of this year, it was my great pleasure to visit Nagoya in the beautiful and splendid country of Japan for the Annual Meeting of the Japan Surgical Society, as hosted by President Nakao. It was an impressive meeting! I was treated most cordially and learned much. Fond memories will persist. During that meeting, as invited by President Tanigawa and Secretary Takaori, I was privileged to meet with the Japan Chapter of the American College of Surgeons and to discuss our Annual Clinical Congress. This annual educational meeting, now in it's 96th year, is the largest such meeting for surgeons in the world. This year, from October 3-7, the Clinical Congress will meet in our nation¼s capitol, Washington, D.C., for the first time since our initial meeting in 1913. Fellows and other surgeons are cordially invited to attend. You will enjoy the rich history and beauty of Washington while participating in an unparallel surgical educational event, viewing an exceptional array of cutting edge, technological and scientific exhibits and interacting with surgeons from all over the world.The antecedents of the Clinical Congress actually preceded the formation of the American college in 1913. The Clinical Congress has and continues to evolve both in format, content, context and in presentation. The traditional model of the meeting has metamorphosed in recent years from what you may have experienced in the past to the present cutting edge format, utilizing a program based upon comprehensive needs assessments; the use of evidence based information whenever available; a focus on translating scientific advances into practice; the use of case based approaches where possible; the inclusion of thematic and specialty specific tracks and the use of a "block" structure to enhance individual scheduling and attendance; the addition of "meet the expert" luncheons and "town hall" meetings and, the enhancement of scientific rigor along with the inclusion of the latest scientific advances. In addition, you will find the inclusion of review courses along with hands-on state-of-the-art surgical skills labs. You will note an emphasis on verification of knowledge and skills following your participation in post graduate courses and the dissemination of important new critical knowledge (that follows the Clinical Congress) through webcasts. You will be aware of marked increases in international participation. Multiple "named lectures", by national and international experts are interspersed throughout the Congress.Residents, fellows and medical students interested in surgery are also welcomed. 88% of overall attendees rate the Clinical Congress as excellent with another 11% rating the Congress as good.Let me reiterate, you are all cordially welcomed and encouraged to attend. You will be very busy during those four days and will depart with enhanced knowledge and skills and perhaps with some new friends. Innovation will continue to be used in program design and in keeping the program relevant. This preeminent educational event, with increasing international participation will continue to increase the reach and breadth of its impact. You may wish to give the annual ACS Clinical Congress a permanent slot on your calendar of "must" events.

巻頭言

この度のニュースレター第二号の発行にあたり、平成２２年４月8-10日名古屋市で行われた第 110 回日本外科学会と同時開催のACS日本支部会にお招きしたACS President Prof. LaMar McGinnesから本年10月 Washington DCで開催予定のACS2010Congressへの招待レポートを得ましたので、それを今回のハイライトとしたいと思います。第110回日本外科学会総会は名古屋大学医学部第二外科中尾昭公教授の会頭の下に行われましたが、American College of Surgeons（ACS）と日本外科学会（JSS）との間で二種類の共同企画が模様されたことによってその距離が更に短くなり、今後の協調に向けて重要な機会になったと喜んでいます。一つはACSから代表者の二名、ACS Presidentの Prof. LaMar McGinnes とProf. Kenneth Tanabe（Dpt of Surgical Oncology, MGH）を招かれて、それぞれの講演を通常プログラムの中に組み入れていただいたことにあります。Prof McGinnes はInternational Symposium 2で"Surgical Education in the USA"を講演し、Prof. Tanabe はInternational Symposium 1でSurgical Oncologist の立場から"Surgical management of colorectal carcinoma liver metastases"をSurgical Oncologist の立場から講演された。日本外科学会の開催中に行うことが恒例になっているACS日本支部総会（4月9日開催）にも両人の出席を得て、Prof. McGinnes から"ACSの現状"の報告をいただき、そして、Dr. Tanabeには"Cutting Livers and Genes"と魅力的なタイトルで進行中のResearch の成果と今後の展望の講演をいただき、出席の支部会員との懇談の時間を持つことができました。もう一つのACSとJSS両学会連携の企画はACS Fellowの日系米人Dr. Susumu ShibataのACS Educational Committee からのJSSへの派遣でした。かねてから双方の会員の交流が行われていますが、この度のDr. Shibataの日本外科学会への派遣は極めて有意義なものとなりました。Dr. Shibataの専門がColorectal Surgery であることから、会期の始まる前に腫瘍幹細胞研究の国際的リーダーである大阪大学消化器外科 森正樹教授の研究室を訪問し、また、腹腔鏡下大腸切除術において国際的にも評価の高い、大阪医科大学一般・消化器外科 奥田準二准教授の手術の模様を見学し、熱心な討議が行われた。また、国立がんセンター大腸外科の森谷部長も訪問し、開腹大腸癌手術を中心にした本邦の最前線の臨床情報に接する機会ともなりました。こうした企画はこの度の日本外科学会事務局長小寺准教授によったが、後に、ACSよりDr. Shibataの感謝をこめた詳細な報告記が寄せられています。

ACS日本支部とACSの連携、協調を促進するためには日本人FACSの数を増加させることがまず必要なことと考えて本邦外科医のfellow 申請を薦めてきました。お蔭さまで ACS日本支部は international member の中でメキシコに次いで最も多くの会員を擁する組織になっています。来る 96回ACS 2010 Congressでは以前に増した数の日本支部会員の発表が予定されていると伺っています。両学会の連携が将来にわたって更に密になってゆくことを願っている次第です。

私の米国の外科医療、ACSとの関わりと日本支部への期待

東京慈恵会医科大学 消化器外科分野 教授
矢永勝彦
Katsuhiko Yanaga, MD, FACS
Councilor, Japan Chapter of American College of Surgeons

私は卒後2年目の1980年から3年間、米国PhiladelphiaのHahnemann医科大学外科ならびに関連病院でSurgical Residentとして勤務した、変わった経歴を持ちます。当時は80-hour work hour restrictionなどなく、かなりハードな勤務でした。

もう30年も前の話で、今となっては我が国でも当たり前のこともありますが、当時米国の病院に勤務して驚いたことが沢山ありました。待機手術患者は術前日に入院し、Utilization Committeeが院内患者の入院の必要性を内部監査し、癌を取り巻く多職種によるTumor Board Meetingや白熱の議論が繰り広げられるが後腐れのないMortality and Morbidity Conferenceが定期的に行われ、書面によるInformed Consentの実践、他人が様々な視点からチェックすることを意識した遅滞・遺漏のない診療録記載、Boardの合格率を維持するためのprogram director主導のteaching roundや発売されたばかりのアップルコンピューターの教育への活用、全米のResidentが受け自身の知識の相対評価ができるIn-training Examination、そして何よりもteaching hospitalにおいてAttending Surgeon自らが術者をすることが憚られる環境などが印象的でした。

その後、一旦帰国して3年後の1986年から3年間、肝移植の臨床と研究目的で同じPennsylvania州のPittsburgh大学外科でThomas E. Starzl教授の下に留学しました。

この二回の米国留学中、ご指導をいただいた外科のAttendingらの大半はFACSで、彼等にとってACSのClinical Congressに出席することが重要であること、また米国の外科医のquality controlと教育に関してACSが強力なleadershipを発揮していることが明らかでした。

帰国後に勤務した九州大学第二外科では上記の変わった経歴から、杉町圭蔵教授の指示で先輩医師のFACS取得のお手伝いをする役を務めていましたが、私にも応募のお許しをいただき、1996年10月10日、San Franciscoで行われた82nd Clinical CongressでのCovocationでFellowに認証されました。ガウンと帽子を着用しての厳かな宣誓に感激した事を思い出します。

1913年にChicagoで設立されたACSは当初からprofessionalismに立脚した"Committed to Excellence"の姿勢で常に診療の質の向上を目指しています。特にResidency Review Commissionの活動に代表される卒後教育への熱心な取り組み、外科修練医の減少対策、外科医の治療成績集積により個別の外科医の弱点を客観的に評価し不得意分野の克服を目指すACS Case Log System、そして政治家を介しての医療保険政策への関与など、わが国が現在直面している、あるいは今後重要性を増すと考えられる問題への取り組みに関して大いに参考になると考えます。

2009年12月に日本専門医評価・認定機構の事業の一環として長崎大学の兼松教授らと英国の専門医制度の視察の機会を得ました。Royal College of Surgeonsの自社ビルやKing's College Hospitalを訪問し、専門医数の制御、EUの医師の週48時間の勤務制限、NHSによる医療などを見聞し、英国の医療がわが国とも米国とも全く異なるシステムと過程で構築され、またかなり標準化と集約化が進んでいることを知りました。英国と比較するとわが国の専門医制度の乱立と外科系学会の調節機能の不備、そして学閥から派生した多様な手術の流儀の継承はあたかも戦国時代の混乱に例えられるように感じました。わが国の外科医療の度量衡が統一され、多施設が常に同じ土俵で臨床データを共有し比較できる、そのような夢が実現すれば、と感じました。

さて、常に先進的な姿勢で世界をリードするACSの日本支部に今、期待されることは何でしょうか。私はまずACSの種々の提言と取り組みをわが国に紹介し、わが国の医療環境に合わせつつ、選択的にそれらの導入を図る事ではないかと思います。またACS日本支部会の構成員は、わが国の外科領域の医学・医療を代表する国際性豊かな方々です。またACS日本支部は他国の支部と連携することで、世界的視野に立つことができます。諸外国の外科医療体制を知る有識者・組織として、外科系の各学会の横断的調節、日本の医療のガラパゴス化の指摘などの役割を担えると思います。例えば日本専門医評価・認定機構が今後取り組む国内学会の合併あるいは専門医制度調節の側面からの支援、海外事情を参考とした日本外科学会の外科医の勤務待遇改善への協力、日本外科学会と麻酔学会の同一期間開催を実現して学会期間の診療あるいは患者さんへの悪影響を最小限にとどめるなど、単一学会では困難なことを国際的な視点から行うことができるように思います。また医療に余裕がなくなったわが国の現状においては、外科医療のオピニオンリーダーとしてそのような視点からの役割が期待されていると思います。

最後にACS日本支部の今後の益々の発展と、会員の皆様のご健勝を祈ります。

製造販売元：ジョンソン・エンド・ジョンソン 株式会社 メディカル カンパニー エチコン エンドサージェリージャパン 〒101-0065 東京都千代田区西神田3丁目5番2号 TEL(03)4411-7905
販売名：エンドスコピック リニヤー カッター 認証番号：222AABZX00147000 クラス：II 管理医療機器 ／ 販売名：エンドカッター 承認番号：21900BZX00881000 クラス：III 高度管理医療機器
＊商標 ©J&JKK 2010

Clinical Congressの思い出

東京慈恵会医科大学付属 青戸病院外科 教授
吉田和彦
Kazuhiko Yoshida, MD, FACS

私がACSならびにClinical Congress(CC)のことを知ったのは、卒業後4年間を過ごした虎ノ門病院である。当時の消化器外科部長は食道外科で有名な秋山 洋先生であった。秋山先生は「成田で飛行機がtaxingを始めるとホームシックになるのだけれど」と言われながら、毎年秋になるとCCに出席されていた。当時、秋山先生が「心細い思い」でCCに参加されていた理由を解る由もなかったが、後年、Akiyama's procedures(食道亜全滴と胸骨後再建、左胸腹連続切開による下部食道・胃全摘)が世界的に認知されたのはACSでの活動が大きかったことを知ることとなる。私がConvocation Ceremonyに参列したのは1991年のChicagoのCCであったが、奇しくもその際に秋山先生がHonorary Fellowに推挙された。先生の晴れ舞台に立ち会えたことは、生涯の思い出となっている。最近でも秋山先生は毎年CCに参加されており、ACSへの思い入れの強さを改めて感じる次第である。また、私がFellowになる際にご推薦いただいたJapan Chapterの初代governorであった藤井巧一先生(東京メジカル・アンド・サージカルクリニック)や小泉俊三先生(佐賀大学)とは、その後もおつきあいさせていただいている。藤井先生も毎年CCにかかさず参加されており、ご挨拶をさせていただくことが恒例となっている。

虎ノ門病院での4年間の研修の後、櫻井健司先生(聖路加国際病院)が主宰する母校の第一外科に入局した。櫻井先生は藤井先生の後にgovernorをされていたので、CCの際に度々食事をご一緒させていただいた。最近、外勤先が同じなのでお話しする機会が多いが、今でもACSのBulletinやJACSを始めとした英文雑誌に目を通されていることには頭が下がる。私が入局した当時の病棟医長は雨宮 厚先生(大船中央病院)で、櫻井先生共々、"Board Certified Surgeon"に米国仕込みの臨床疫学(現代風に言えばEBM)に基づいた斬新な外科学をご教示いただいた。この時代に培った米国風の合理的な物事の考え方は、現在の自らの思考パターンの基礎となっている。

1987-88年にMemorial Sloan-Kettering Cancer Center外科に留学した際には、Murray F. Brennan先生に大きな影響を受けた。自らがForeign Medical GraduateであるBrennan先生は留学生に寛大で、さらには米国の懐の広さを体現できた。CCではSloan-Ketteringが開催するalumni partyに参加し、fellow仲間との旧交を深めることができた。これらの人脈を通して、MD Anderson, Penn、CHOP、UCSFなどへ後輩を留学に出すことができた。CCの際には留学生との食事会を企画したが、米国での慣れない生活に戸惑いながらも何かを得ようと模索している若手外科医と再会することは、大きな喜びでもあった。

1990年台前半より内視鏡手術が興隆し、CCも内視鏡手術のウエイトが大きくなった。本邦での内視鏡手術の創始者である出月康夫先生、さらには山川達郎先生(帝京大学)がgovernorとなられたが、CCに参加する内視鏡外科医も増加し、知己となることができた。

ACS(CC)を通して多くの「人」と知り合い、親交を深めたことは、僥倖と言わざるを得ない。米国の医療の良い面を学ぶことは、一部ガラパゴス化した日本の医療のbreakthroughになりうると常に考えてきた。今後も多くの若い日本人外科医がACS(CC)を通して、広い世界を見聞し、日本の医療の明日に生かすことを期待してやまない。

事務局便り

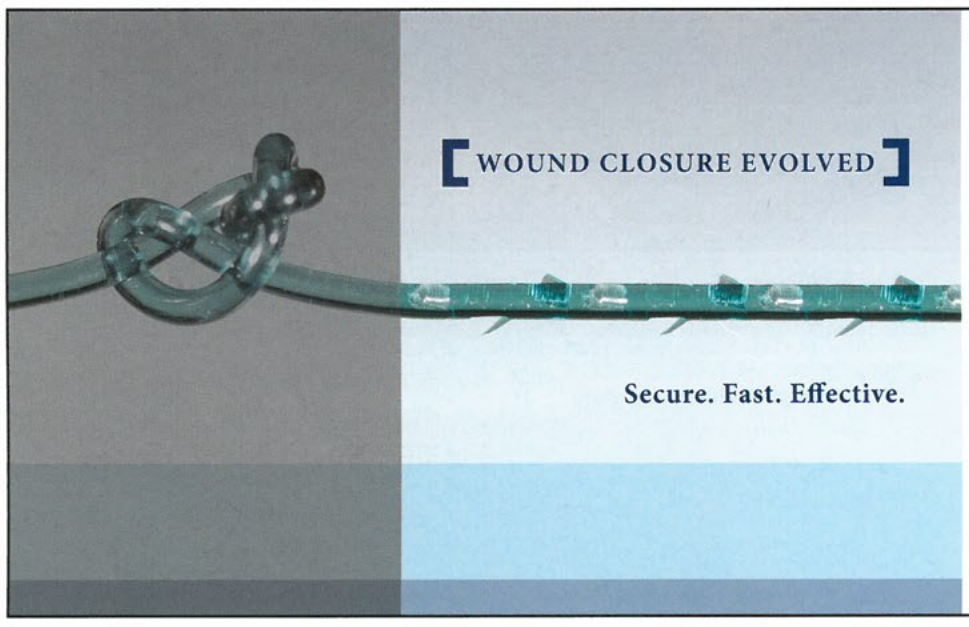
ACS日本支部レセプションについて

本号巻頭で、ACSのMcGinnis会長から日本支部会員の皆様へご招待がありましたとおり、首都Washington, DCのWalter E. Washington Convention Centerにおきまして、2010年10月3日から7日まで、American College of Surgeons 96th Annual Clinical Congressが開催されます。今年も恒例のJapan Chapter Receptionを下記のごとく開催させていただきますので、ご案内いたします。このレセプションは、前ガバナーの山川達郎先生から引き継ぎまして、現ガバナーの谷川允彦先生が毎年主宰されているもので、今年も日曜日のConvocation終了後に、本年Fellow(Initiates)となられた先生方をお迎えして開催します。ACS学会ヘッドクウォーターホテルであるWashington Marriott Wardman Parkで行いますことからACS本部役員も多く訪れていただけるものと期待しております。日本支部会員の先生方には、旧交を深めていただければと存じます。また、Fellowが推薦する方であれば、どなたでも参加できますので、参加希望の先生はあらかじめ谷川教授または事務局まで、ご連絡いただければ幸いです。

American College of Surgeons Japan Chapter Reception

■Date : Sunday, October 3, 2010 ■Time : 8:00 pm - 10:00 pm
■Place : Washington Marriott Wardman Park Lobby Level "Maryland Suite A"
■Dress Code : Business Casual

ACS日本支部事務局 高折恭一
〒606-8507 京都市左京区聖護院川原町54 京都大学附属病院肝胆膵・移植外科内
TEL.075-751-4323 FAX.075-751-4348 e-mail:takaori@kuhp.kyoto-u.ac.jp



COVIDIEN
positive results for life

V-Loc™180 クロージャーデバイス

V-Loc™180クロージャーデバイスは、結紮をせずに縫合が可能なKnotlessデバイスです
新しいテクノロジーであるバーブとループの組み合わせが縫合の常識を変えます

販売名：V-Loc180 クロージャーデバイス
医療機器承認番号：22200BZX00140000

製造販売元 コヴィディエン ジャパン株式会社
〒158-8615 東京都世田谷区用賀 4-10-2
PHONE (03)5717-1270 FAX (03)5717-1279 http://www.covidien.co.jp

COVIDIEN、COVIDIENロゴマーク及び"positive results for life"はCovidien AGの商標です。TMを付記した商標はCovidien companyの商標です。© 2010 Covidien

ACS International Guest Scholarshipを受賞させて頂いて

奈良県立医科大学 消化器・総合外科
庄 雅之
Masayuki Sho, MD

■はじめに

私は、幸運にも2008年のAmerican College of Surgeons International Guest Scholarship Awardを受賞させて頂きました。この賞を通じて経験しましたことを御報告申し上げます。私は現在、奈良県立医科大学で肝胆膵外科の臨床に従事しつつ教室の若い先生達とともに腫瘍免疫を中心とした基礎的研究もすすめています。また1999年から3年半の間米国ボストンのHarvard Medical School, Children's HospitalのMohamed H. Sayegh博士に師事し、移植免疫の研究に従事しました。留学中は精一杯の努力をしましたが運良く予想以上の多くの成果を挙げることができました。同時に周囲にも恵まれ、業績以上に貴重な経験を積ませて頂き、大きな人生の財産となりました。留学中に痛感しましたことの一つはやはり日本、それも奈良というごく限られた狭い世界にいるだけでは人として、勿論外科医としても十分ではないということでした。できれば留学後も国際交流を続けよう、少しでも世界の最先端に近いところにいよう、言い換えれば井の中の蛙となることは避けようということでした。そうした中でACSのサイトで学ぶうちにこの制度を偶然知りました。現在日本外科学会とも毎年交換交流の制度があることは知っておりましたが、自力でchallengeしてみようとインターネットで直接申し込みました。2005年に初めて応募しましたが、この際には次点で落選し、alternateとしての採用結果で悔し涙を飲みました。あらためて2007年にapplyし、運良く2008年のScholarの一人として選んで頂きました。私の知る限り、1963年から連綿と続くこの制度で1993年の加納宣康先生(亀田総合病院院長)が日本人で初めて受賞され、その後1999年に河野浩二先生(山梨大学第一外科)が受賞されており、おそらく私が日本人3人目にあたると思われます。

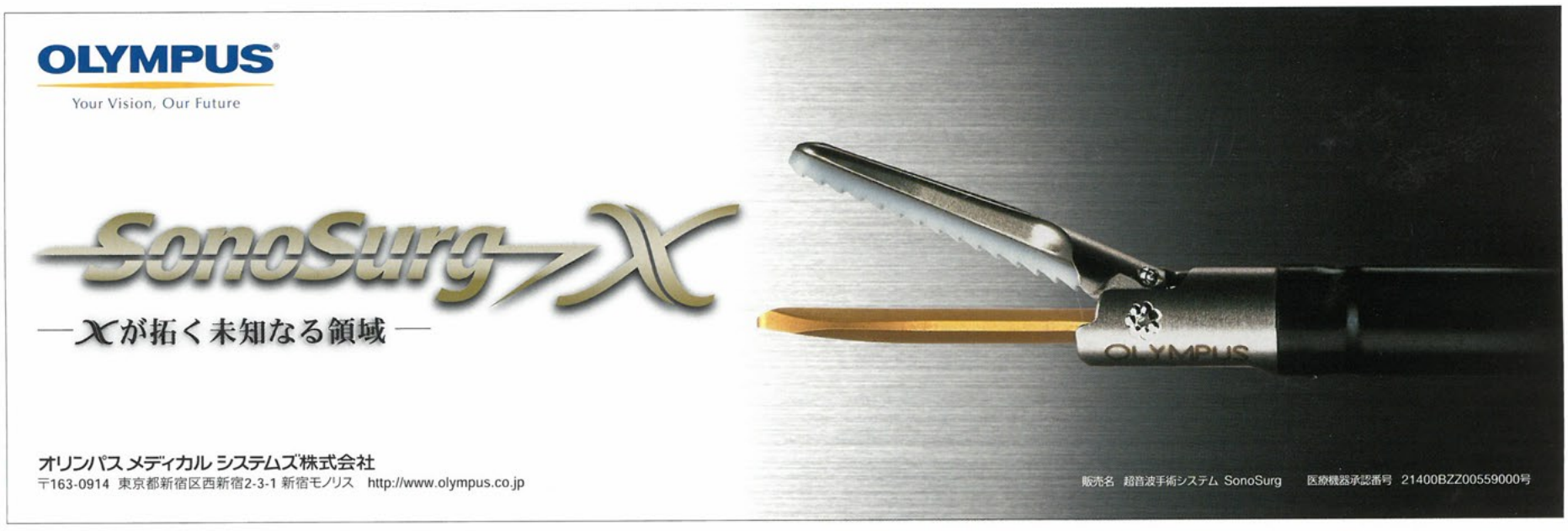
■ACS annual meeting 2008

本制度は本当に至れり尽くせりで、学会参加前から様々な配慮がなされ、本部からは滞在中の宿泊等の手配、いくつものParty、学会後の米国内施設見学等について連絡を頂きました。学会前日に集合であったと思いますが欧州のみならず途上国からも選ばれた私を含めた10人が一堂に会しました(図)皆様々なキャリアの外科医達でしたが、やはり個々のmotivationは高く、何日間かを共に過ごせたことは本当に有意義な体験でした。学会では我々のためのセッションが設けられ、私も現在行っています膵癌の新規補助化学療法についての講演をさせて頂きました。会期中に歴代のScholarとの昼食会が催され、参加されていた加納先生と初めてお会いでき。励ましのお言葉を頂き、大変感激致しました、また, ACS日本支部会長であり大阪医大教授谷川允彦先生や事務局長も務められている京都大学の高折恭一先生、長崎大学教授兼松隆之先生ともお会いすることができ、様々に御激励頂き、貴重な機会を得ました。学会自体は日本のように臓器別に区分されておらず、一つのビデオセッションに消化管も肝胆膵も広く組み込まれており、いくつかの相違点を感じましたが、全体を通じて「教育」に強く重点を置いている印象を受けました。

■後列左から4番目が筆者、隣は吉住朋晴先生
(九州大学、日本外科学会より派遣)

■Pittsburgh大学

学会終了後の施設見学先として、Pittsburgh大学を選択しました。今後日本でも普及するであろう腹腔鏡下肝切除術で有名なDavid Geller教授を訪ねるためでした。やはり事前の配慮もあり、問題なく訪問は許可されました。Geller先生からも歓待して頂きました。何度か手術を直接見させて頂きましたが、血管および実質にも自動縫合器をふんだんに用いて、わずか2時間の見事な肝右葉切除には本当に驚きました。多忙にも拘らず, オフィスでは臨床や研究に関することだけではなく、privateなことや施設についても色々と話してくれました。初対面にも拘らずとても親切に対応してくれたことには心から感謝しました。途中で私よりもわずかに1歳年上なだけであることもわかり、会話はつきませんでしたが今後も交流していければと思っています。

■おわりに

未だに浅学かつ未熟ではありますが、この賞に感謝し、また恥じないように今後は国際交流を含めた外科の世界での貢献を心に銘記しております。ACSの正会員にも近いうちにapplyする予定ですが、少しずつでも若い外科医への橋渡しをすることも生涯の重要な任務の一つと決意しております。このような拙文の発表の機会を与えて頂きましたことに改めて感謝申し上げます。